

知的障害を伴う自閉症児及びダウン症児における こだわり行動等の対処法について

―支援学校低学年児童における集団生活の適応支援―

大阪教育大学大学院連合教職実践研究科
高度教職開発専攻特別支援教育コース

学籍番号 239503

氏 名 屈 司杰

大学院主指導教員 井坂 行男

大学院副指導教員 岩崎 弘

1. 研究の背景と目的

1. 1 研究の背景

近年では知的障害を伴う自閉症スペクトラム児やダウン症児の数が増加傾向にある。インクルーシブ教育等の推進により発達障害児が学べる場も多様になっている。幼稚園から高等学校まで継続した特別支援教育が実践されている。文部科学省（平成24年）から「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」が出された。特別支援学校の幼稚部を卒園した子どもが継続して特別支援学校の小学部に進学することは、学習上及び生活上の配慮が受けられ、それぞれの実態が把握され、適切な教育支援ができると考えられる。

1. 2 研究の目的

本論文の目的は、特別支援学校低学年における知的障害を伴う自閉症・ダウン症である対象児童に対してアセスメント調査を通して、知的障害を伴う自閉症児とダウン症児のこだわり行動を観察し、実際にそのこだわり行動に介入することによって、2名の対象児童の課題である偏食問題や排泄問題等の改善について考察することである。

2. 実践結果

2. 1 対象児童に給食指導を実践した結果

対象児童Q児とR児の給食の摂食量の変化があり、二人の偏食課題に対して、教員からの介入を実施した結果は、Q児は顕著的に野菜類や牛乳の摂食量が上がってきたことがわかった。主食であるパンの食べ方の指導によって、パンを食べる量も少し上がる事ができた。R児は給食指導を通して、主食の摂食量が安定的であり、野菜類がわずかに上がる事がわかった。一番改善が見られたのは牛乳の摂食量である。最初の1/5から1/4ぐらいいしか飲めない状況から約4/5の量まで飲むことができるようになった。Q児の給食指導を行った結果は、野菜類や

牛乳等に苦手な偏食課題を2学期の給食指導により、ほぼ改善されたことが考えられる。パンを食べにくいことに対して、小さいサイズに切ることと、パンを食べるときと一緒に牛乳を飲むことを促すように指導し、改善傾向が見られるようになったことである。デザートに出る酸味が強いフルーツポンチ等に対して、本人からの抵抗が強い傾向で、改善されていないことである。

2. 2対象児童に排泄指導を実践した結果

対象児童であるQ児が排泄後にトイレットペーパーをたくさん取る時に切りがない（たくさん取ってしまう）状況から、5秒ぐらいまで止めることができた結果がわかった。課題の問題については、知的障害を伴うダウン症児の中では、切りがないことで、トイレットペーパーを自分からちぎる場合は外界からの介入が必要だと考える。又、排泄後に手を洗わない課題の解決について、教員が排泄後に声掛けをすることで手洗いのことを促すように指導した結果は、2学期になって、排泄後に自分で手を洗うことができるようになったことである。手を洗う意識が身に着けるようになったと考える。

対象児童であるR児が学校のトイレで排泄しない、排泄が困難の状態から、学校で排泄できるようになり、成功した回数が上がっている状態になった結果である。指導方法の中に、キャラクターの効果があったことに注目した。R児が好きなキャラクターのセリフを言い、その場で成功まで繋がることができたことがわかった。知的障害を伴う自閉症児にとっては、キャラクターの存在がとても重要だということが考える。

3. 考察

知的障がいを伴う自閉症・ダウン症児のこだわり行動に対して、児童と日々の関わりを通して、児童生徒と信頼関係を構築することが重要である。児童が持つこだわり行動のすべてに介入する必要はなく、児童の健康発達に影響を与えないこだわり行動に対して、そのまま児童の意思に従い尊重すべきである。児童の立ち場に替え、児童の心を理解した上で適切な指導及び必要な支援を行うことが最も重要だと考える。本研究を通して、ダウン症児の頑固さが見られ、その頑固さに対して、負けられない心で諦めずに児童の興味・関心のある物事を観察し、児童の性格を知り、それに応じた適切な支援を行うことができる。自閉症児との関わりの中に、児童が好きなキャラクターの人物をいくつ知ることができ、さらにそのキャラクターについて調べた上で、児童の心情を分析することにした。発達障がいのある児童生徒の世界には、キャラクターの存在が非常に強いと考える。知的障害を伴う自閉症児にとっては、キャラクターの効果は自分の想像の世界に効く場合があると考える。動画等を見せることを通して、物事の真似を正確にできることは困難だと考える。又、知的障害を伴う自閉症児が好きなことと特定なキャラクターの行為に対して、こだわりだと考える。一定な物ごとに対して、興味・関心を持ち（興味・関心が狭いこと）、繰り返して同じ動画を見たり、同じキャラクターの名前やセリフ等を言ったりすることはこだわりだと言える。だが、R児にとっては、このようなこだわりは本人に悪い影響を与えることが見られず、給食や排泄の場面にこのようなキャラクターの効果で他の課題であるこだわりの改善まで繋がることができたと考える。現在では、介入が必要ではないと考える。今回の研究を通して、自閉症児にとっては、キャラクターの力で、たくさんことができるようになると期待できると考える。